

# 和田光一先生との思い出

岩川 幸治

My Memory of Professor Wada

IWAKAWA Koji

和田先生と初めてお会いしたのは、私がつくば国際大学の社会福祉学科に助手として採用された2004年のことである。和田先生は東京都の職員として高齢者福祉、障害者福祉、児童福祉、地域福祉と福祉のあらゆる分野でのお仕事をされ、2003年からつくば国際大学で教鞭をとられていた。その翌年に和田先生と一緒にお仕事をさせていただくことになったのだが、私は福祉をきちんと学んだわけではなく、福祉のことがよくわからないまま、悪戦苦闘しながら、日々の業務にあたっていた。そのなかで、和田先生には、たくさんのことを教えていただいた。今の私があるのも和田先生のおかげだといっても過言ではない。

つくば国際大学では、社会福祉士を養成するために必要な実習関係の業務を中心に、学生の教育や進路指導、社会福祉士の国家試験受験対策などを行い、社会福祉を学んだ学生が、社会で活躍できるように心がけていた。なかでも社会福祉士の養成は、大きな仕事の一つであった。社会福祉士になるには、まずは社会福祉士の受験資格を取得しなければならない。そのためには、およそ1ヶ月間に及ぶ実習をすることが必須とされている。実習期間中は、実習担当教員が実習先を訪問し、学生の指導をすることになっており、和田

先生は実習担当教員として、自家用車で実習先を訪問されていた。私も同行させていただき、和田先生からいろいろとお話を伺った。特に車中でお話したことが印象に残っている。将来、社会福祉士として働くにあたって、どのような目的をもって実習を取り組んだらいいのか、学生をどのように指導したらいいのか、実りある実習をするためには、どのような方針を立てて、実習先と相談しながら実習の内容や指導方針を決定していくのかなど、現場での経験に裏打ちされた説得力のあるお話を数多く聞くことができた。東京都の職員だったときの経験、長年にわたって培ってきた福祉に対する見識の広さには驚くばかりで、私の視野を広げてくださった。福祉の現場で働くには、やりがいを感じたり楽しいこともたくさんあるが、それだけではなく、大変だったり苦勞したりすることもあることを踏まえたうえで、学生を指導していく大切さも学んだ。その当時は福祉の現場で働いた経験が私にはなかったため、第一線で活躍されてきた和田先生の言葉の一言一言はとても重みがあった。また何かわからないときに和田先生にご意見を伺うと、明確にかつ的確に回答してくださり、和田先生の存在の大きさを日々感じていた。

つくば国際大学では3年間という短い期間ではあったが、和田先生と一緒に仕事をさせていただいた。和田先生が明るく、楽しそうに、またとても熱心にお話をしてくださる顔を今でも忘れることはできない。そんな和田先生の笑顔にまた触れて、創価大学で一緒に仕事をさせていただけることになったときは、とても嬉しかったことを覚えている。私が創価大学の社会福祉専修に着任したのは、社会福祉専修1期生が4年生のときだった。授業では学生が積極的に発言をしており、意欲的に勉学に励んでいることに感銘を受けた。また社会福祉専修生のみを対象にした授業も多かったため、授業の終わりには、学生自らが企画をして、毎月1回、その月に誕生日を迎えた社会福祉専修生をお祝いしており、学生同士がとても仲が良く、みんなで頑張っていこうという雰囲気を感じ、結束力の強さはとても印象的だった。

学生が意欲的に勉学に励み、仲間を大切にするというのは、一朝一夕にできるものではない。和田先生を中心にして築き上げてこられたからこそできたのだと感じた。そのことは、社会福祉専修1期生が、社会福祉士の国家試験で81.3%という、極めて高い合格率をあげることができたことにも結び

ついている。和田先生をはじめ馬場先生、森先生、文学部事務室の皆様が、社会福祉専修の礎をしっかりと築き、きめ細かに学生を指導してこられた賜物だと実感した。和田先生が常々おっしゃっている、誰もが排除されることなく安心して生活することができるソーシャルインクルージョンを実現できる社会を目指して、多くの学生が社会で活躍していることだろう。

和田先生のエネルギーに満ち溢れているところも、学生を惹きつけてやまないのだろう。スキーやテニスなど多趣味で活動的なところは、無趣味で行動力がない私とは異なり、とてもうらやましい限りだった。しかも一つひとつの趣味が、30年や40年ととても長く続けられているものばかりで、継続して物事に取り組むことや、長年続けているからこそたくさんエピソードが生まれ、話題が豊富であることも和田先生の魅力的なところだった。自分が興味のあるものをみつけて、人生を楽しむ、それがいつまでも若々しくいられる秘訣だと感じた。

長年、福祉・教育の現場で活躍され続けた和田先生に、少しお休みしてゆっくりしてくださいと申し上げたいが、あちらこちらからお声がかかってしまい、周りが和田先生を放っておかないだろう。それは和田先生を必要としている方が多くおり、和田先生が人を引き寄せてしまう人望があつてのこと。なかなか難しいかもしれないが、無理はなさらず、和田先生ご自身の時間を好きなことをしながら過ごしていただきたいと切に願っている。

和田先生、お疲れ様でした。

本当にありがとうございました。

